
靈長類研究所年報

VOL. 3

1973

**ANNUAL REPORTS OF THE
PRIMATE RESEARCH INSTITUTE
KYOTO UNIVERSITY**



ハヌマン・ラングールの生態（生活史研究部門）



積雪期のニホンザル（社会研究部門）



ロコモーションの実験的研究（形態基礎研究部門）



前頭葉の機能の解析（神経生理研究部門）

目 次

	ページ
創立7年目を迎えて	大 沢 濟
I 研究所の概要	
1. 組 織	2
2. 予 算 概 況	2
3. 研 究 設 備	3
4. 研 究 活 動	3
II 総 説 — 霊長類学への展望 —	
1. 集団遺伝学の立場から	野 沢 謙
2. 生態学または生活史研究の立場から	杉 山 幸 丸
III 共同利用研究	
1. 概 要	22
2. 研 究 成 果	
設 定 課 題	23
1. ニホンザル地域個体群の研究	23
2. 生活様式ならびに身性特徴との関連における霊長類のロコモーションに関する研究	34
3. 霊長類の生理的適応	36
4. 主としてニホンザルを対象とした行動の研究	39
5. 行動の発現機序に関する神経生理学的研究	41
6. 霊長類の生航に関する基礎的研究	45
自 由 課 題	48
3. 研 究 会	60
付 録 共同利用研究による業績一覧 (44年度~47年度)	63
.....	
特 集 シンポジウム「ホミニゼーション」II	65

創立7年目を迎えて

初代の所長として6カ年の長きにわたり、嘗々として研究所創設の業務に身を挺して来られた近藤四郎教授が、本年3月末内規によって所長職を退かれた後を受けて、まことに思いもかけず、経験の浅い私にその重責が荷せられることになった。そこでまず身に沁みて感じたのは先輩諸氏の労苦である。わが国ではまったく類例のない研究所をこれまでに育てあげてきた関係者の熱意と努力に、いまさらながら深い敬意の念を覚える。それと同時に、研究所設立の第一次計画が完成期に入ろうとしている現在の段階の重大さがひしひしと感ぜられる。

昭和48年度には生化学研究部門の新設が認められて、本研究所も8部門2施設を擁するまでに成長した。関係当局の御理解により、当初の計画は着々と進んできたが、その間学問の進展や研究所内外の情勢の推移に伴って、さまざまな歪みが生じてきたことも否定できない。これらの歪みを是正するために、これまでにひとかたならぬ努力がなされてきたにもかかわらず、未だ解決にほど遠い問題がかなり残っている。緊急を要するものに、たとえばサル類保健飼育管理施設の充実がある。単に実験用サル類の検疫・飼育・保健管理のために、現状にみあうだけの施設に拡充する必要があるだけでなく、大規模な繁殖コロニーを設けて自家生産を計らなければ、共同利用研究はもとより所内の研究の需用にもとうてい応じきれないような状況になりつつある。

また、野外研究の場を確保する必要上、研究林を設けることをかねてから要求していたが、幸い本年度はその一環である下北研究林が特別事業として認められた。国土開発の名目のもとに自然破壊が燎原の火のように拡がりつつある今日、この計画を全国的に推し進めることが焦眉の急であると考えられるが、これは当該地域の管轄機関や地元との複雑な折衝を必要とするきわめて困難な事業である。

本研究所運営委員を選出する母体である霊長類研究連絡会が、その実体にふさわしく名称を霊長類研究者連絡会と改め、会規約も制定して、本年3月新発足した。現在会員は約210名に達しており、去る6月には新会員による推薦投票が行なわれ、第4期運営委員が選出された。共同利用研究に関する研究所の運営機構が一応整ったわけで、会員各位の御理解と御協力に心から感謝の意を表する。

この年報の編集が進められているとき、本年4月1日定年制によって退官された時実利彦前教授が重病との報が伝わり、所員一同の祈念も空しく、8月3日ついに不帰の客となられた。まことに痛恨の極みである。先生は設立準備委員として本研究所の設立に情熱を傾けられ、研究所発足後は神経生理研究部門の教授として霊長類の脳生理学の進歩のために先導者の役を果たされたのみならず、近藤前所長のこの上ない相談役として、本研究所の運営・発展のために尽くされた功績は実に偉大である。今はただ謹んで先生の御冥福をお祈りするよりほかはない。

昭和48年9月1日

所長 大 沢 濟

特 集

シ ン ポ ジ ウ ム
ホ ミ ニ ゼ ー シ ョ ン

Ⅱ

第3回ホミニゼーション研究会抄録

(1973年3月23～24日)

目 次

総合研究と Hominization 研究会のあり方	河合雅雄 (京大・霊長研)	67
I 発 達 の 部		
人類における歯の進化	埴原和郎 (東大・理)	69
経験の効果について—比較行動学的アプローチ—	井深允子 (京大・霊長研)	70
行動発達と比較研究からみた hominization の問題点—ニホンザルの群れ落ちを例に—	糸魚川直祐 (阪大・人科)	72
II 言語・コミュニケーションの部		
言語の系統発生—脳の働きからの推論—	河内十郎 (専修大・文)	74
言語の普遍的構造と生得説	神尾昭雄 (慶大・文)	76
実験的行動分析からのアプローチ	浅野俊夫 (京大・霊長研)	78
ニホンザルの性行動に見られる記号	榎本知郎 (京大・理)	82
コドモの遊び仲間を通してみたニホンザルのコミュニケーション	森 梅代 (京大・霊長研)	84
“視覚言語”の獲得—チンパンジーの場合—	室伏靖子 (京大・霊長研)	87
チンパンジーの社会的行動	森 明雄 (京大・理)	88
III 総 括		
	渡辺直経 (東大・理)	91

昭和49年3月1日発行

発行所 京都大学 霊長類研究所
愛知県犬山市官林

編集 同研究所 出版委員会
岡田守彦 田中二郎
室伏靖子 二木宏明

印刷所 新美印刷株式会社 土倉九三
京都市北区小山西花池町1の8
(電話 451-4844・414-1286)
大阪市天神橋筋1丁目102
(電話 361-8128・8129)